

Kagoshima Art Navi

かごしまアートナビ

ART NAVI

ART NAVI

ART NAVI

ART NAVI

ART NAVI

ART NAVI

ART NAVI

お知らせ

本紙面に掲載しているイベントや施設についての開催・開館状況など最新の情報は各施設へご確認下さい。

- 🕒 ―― 開場時間
- 📅 ―― 休み
- 🎫 ―― 入場料
- ☕ ―― カフェ
- 👩‍🎓 ―― 授乳室
- ♿ ―― 多目的トイレ
- 🏠 ―― ホームページ有り
- 📷 ―― Instagram有り
- 🐦 ―― Twitter有り
- 📘 ―― facebook有り

お知らせ

鹿児島中央駅～市役所

鹿児島中央駅～市役所

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー ギャラリー

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設

ー 複合文化施設</

「創り出す」から紡ぐ、幸せのかたち

吉野町にある、知的障がい者支援施設「しょうぶ学園」。緑あふれる敷地には、ギャラリーやカフェが並び、地域住民の憩いの場となっています。ここから生まれるアートやクラフト、音楽が、なぜ人々を魅了してやまないのか。そのユニークな活動の源泉に迫ります。

「しょうぶ学園」の活動の様子を、施設利用者やスタッフのインタビューから紹介します。

話を聞いた人：

福森伸

（しょうぶ学園統括施設長）

▼



1959年鹿児島県生まれ。知的障がい者支援施設しょうぶ学園統括施設長。クラフト・音パフォーマンス・家具プロジェクト・食空間コーディネートなど「衣食住＋コミュニケーション」をコンセプトに、工芸・芸術・音楽等、新しい「SHOBU STYLE」として、知的障がいをもつ人のさまざまな表現活動を通じて多岐にわたる社会とのコミュニケーション活動をプロデュースしている

――

「しょうぶ学園」の活動の様子を、施設利用者やスタッフのインタビューから紹介します。

40年追い求めた

僕らだけの福祉観

――

しょうぶ学園が設立されたのは、約50年前の1973年。当時は、社会復帰を目指したりハビリテーションの要素が強い施設でした。設立10年後の1983年、私が施設を手伝うことになり、以来10年ごとに異なる目標を掲げて運営してきました。その始まりとして「工房しょうぶ」を立ち上げ、それまでの下請け仕事から木工・陶芸・刺繍のオリジナル製品づくりへとシフトしました。そうしていくうち、利用者が生み出した表現活動に力を入れた10年。そして、「衣・食・住＋コミュニケーション」を軸に、施設内にカフェやパン屋を開業して地域住民を呼び込むことで、『憩いのコミュニティづくり』に励んだ10年でした。積み重ねが大事なので、毎年夏に開催したフェスは、13年連続でやりましたね。地域に私たちのことを知ってもらい、リピーターとなるサイクルを作り上げたかったのです。

職業柄、健常者と障がい者の行動の違いをずっと観察しています。例えば、縫い物を長年続ければ、僕たちはこれまでよりも良いものを作りたいと考える。一方、利用者は同じものを作ろうとする。「それはなぜだろう?」と。彼らは、一度満足したら同じ満足を得ようとする。確実性が高いから。いつもと違うことをするのは、苦痛なんです。僕らはリスクをおかして、より良いところを目指す。しかも自ら選択して。要するに、欲があるかないかの違い。彼らはずっと同じことを続けているので、根気強く見えるのですが、欲が少ないから実は楽なんです。ルーティーンになっているという場合が非常に多い。ただ、彼らのように僕らが30年それを続けられるか、とも考えるわけです。そういった違いを頭に入れながら、僕らの尺度で良かれと思って彼らの自由を制限しない。そこを模索してきましたね。しょうぶ学園がものづくりをベースにするのは、彼らを理解するうえで有効な手段だから。カタチに残りますからね。上手く喋れない人たちは何で表現するのか？ 表情や行為だけじゃなくて、作ったものの形やディテールから分かってくるんです。創造的文化的活動が施設全体の福祉観としてあって、ツールとしてクラフトや音楽もある。五感に訴えて交感し合うというかね。

ここに至るまでには、紆余曲折ありました。利用者と木を彫って器を作ろうと作業を始めて、「終わりました」と言われて現場に行くと、全部木屑になっているんですね。終わっているんです、確かに(笑)。彼の目的は器じゃなかったのか、彫るために彫っていた。衝撃でした。その産物をクラフトとするのかアートと呼ぶのか。表現



地域住民参加型の新しいアートセンター「アムアの森」。しょうぶ学園らしいアートとクラフトがたくさん詰まっている。

に驚かされたり、疑問を持ったりやずっと繰り返しながら葛藤しました。彼らは障害という言葉の意味や、この施設に来た経緯も十分に分かっていない。自分の意思で選んできたわけでもない場合も多い。受け身で生きてきたからこそ、周りからサポートを[与えられる]から、世の中に[創り出す]をモットーにしました。良いものを作って売って、世の中にここで作った器を気に入って使ってもらいたい。“福祉ブランド”の先入観や、義理で買われるのだけは避けたくて、「工房しょうぶ」という名前で展覧会を始めました。そうしていくうち、ひとつのアトリエとして、正しく評価されるんです。良くないと売れないし。目が肥えた人たちから、何が良いのかということをし少しずつ学んでいきました。自分たちでトラックで運搬して接客して、そのうちに口コミが広がって、公募展に出るなど全国に展開するようになりました。

布の工房「Nui Project」の刺繍作品は、美大の先生が目をつけて下さって交流が始まり、展覧会に声を掛けて下さりましてね。1999年に全国7カ所で開催した展覧会『工房しょうぶアウトサイダーアート全国巡回展』は、ターニングポイントでした。一方で、美術を専門とする識者からは議論的になりました。何を以ってアウトサイダーアートやアール・ブリュット^[1]とするのか。結局は、定義の問題。先に「障がい者」ありきだと、物事が屈折するんです。議論がゴールではないので、ジャンルにこだわらないことに決めました。外の評価より、ここで生まれるものにベストを尽くそうと切り替えて。アート目線というと、素人の集まりですからね。彼らが持つ直感的な部分を上手く引き出しながら、それを障害



施設利用者が自由気ままに針を動かして作る刺繍作品。ステッチや色、縫い方も百人百様。みんな違って、それでいい。

――

する制約も減らしていく。アートという発想を、暮らしに反映させることが僕らの大切な仕事です。個々人はバラバラだけど、居心地が良い。暮らしもアートも全部ひっくるめて幸せが良いです。福祉って簡単に言うと、「幸せになる手伝い」なのだと思います。

――

手を入れる、入れられている。

――

私が職員に日頃から伝えているのは、「ものを作ることは、生きること」というテーマ。原始時代からヒトは石器を作り、狩猟の武器を作り、農耕の道具を作って進化しました。作ることなく、生きていけなかったのです。工業化・デジタル化が進んだ現代でも、利用者の行動を見ていると、何かを作ることがやっぱり大事なのだと気付かされます。パソコンも使えない、電話もかけられない、数字も分からない。だけど、手を動かすから。彼らも僕らも幸せになるには、原始的なことで事足りるのではないかと考えています。もちろん経済発展なくて、この環境は成り立ちませんがね。周りにも自分で作ったもので生活している人はほとんどいません。自分でものを作らない時代になりました。ものを作る時の眼差しや心は、柳宗悦の民藝の思想とリンクします。無名の工人たちが世の中へ向けてものづくりに励む姿と、僕らが誰かのために長年作り続ける姿勢。ひたむきに、繰り返しのによって身体に覚えこませる行為が、非常に純であるというか。行き着くところは近いと感じます。テクニクはないかもしれないけれど、愛情を持って作ることを大事にして欲しい。“スーパー素人”としてね。

学園では研修会として、職員の前で話す機会を年4回設けているのですが、直近は「手入れ」がテーマでした。自分たちの道具はもちろん、人に



――

も手を入れていくことが僕らの仕事。障害や怪我を治療し、癒す行為も含まれています。決して「交換する」仕事ではない。精神病の患者が負った心の傷は、もとに戻ったように見えても、そのプロセスは戻ることはありません。一回ショックを受けていますから。だから、修理や磨き上げと似ています。使えるものを使って、その痕跡を残しつつ大事に磨き上げると味になるわけで。金継ぎみたいなね。ここで動いていると、互いに手を入れて・入れられているイメージがあるんです。フィフティ・フィフティみたいな感覚です。支援者として報酬をもらっているのだけど、彼らから人生観を頂いて影響を受けているんですよ。人間的なものをよく見せてくれますから。でも、僕らがそれに気がつかないと見えてこないんです。

差別のない共生社会を作ろうという動きはあっても、知的・精神障がい者が実社会へ出ると難しいことがたくさん待ち受けています。自立して社会に送り出しても戻ってくる方も多くいます。それほど世の中は複雑な決まりごとや規範でいっぱいなんです。そこで、彼らが社会へ出ていくのではなく、人々に来てもらうという発想にすると、ここが“ノーマルな社会”にできる。彼らが外へ出るのに比べて、よっぽど簡単。ただ、魅力がないと誰も来ないですよ。そんなわけで、ニューヨークのセントラルパークのミニチュア版みたいなものを目指しました。安全で車も信号もない。大声で唄っても、寝っ転がってもいい。カフェやギャラリーもある。苦情も来ないですよ。しょうぶ学園が彼らのホームグラウンドだから。そこに地域住民がリピートしてくれると。リハビリテーションをメインとしたグループホームでは、トラブルを避けて地域との交流も難しいし、コミュニケーションも生まれにくい。ここにはお客さんも動物もいて賑やかです。殺

いうことも分かっていないことも格好いいんですよ。作ったものを見返すことがないし、執着もしません。懐かしがることもない。それは、ものに対してだけじゃなくて、事柄に対してもなんです。今この瞬間が中心なので、今が良ければそれを続ける。過去を振り返らないし、未来も展望し過ぎない。僕らはその繰り返して現在を見ているんですけどね。美術館に彼らの作品を持って行って、大衆にこういう人たちがいるんだと世に伝えるのが私の役割ではあるけれど、当の本人の幸せに繋がるのかと自問自答をすることがあります。展示されて、人から認められて声をかけられると本人の自信にも繋がって、新たな作品ができて、また人が見に来るという好循環も生まれる。ただ、「僕らが良い気になったらまずいよね」「そもそも出さない方が良いんじゃない」という職員の声もあります。なぜなら、彼らにとっては特別でもない日常ですから。アートとせず、日常を大切に身を置けばみんな幸せかもしれません。ものに向かう姿勢が気取ったり、狙ったりすることがないように。アーティストとして祭り上げることもなく。そのままを過ぎていく、が大切なのだと思います。来年は設立50年の節目。この先の10年は、人はどう生きたら良いのだろうかという大きな問いに対して、利用者も職員も含めた幸福論とは何かを模索していこうと考えています。

――

幸福は日常にこそある

――

物事をピュアに見ていきたい、と思うことがよくあります。初めて見るアート作品と対峙すると、まずキャプションを読んでしまう。自分が受けた印象を、解釈しようと努めているんですね。もともと赤ちゃんの頃は、五感で選り好みをして気に入ったら離さない。明確な理由はありません。成長とともに物事を判別し出すと、理解をしはじめ、ピュアな感性は外に追いやられる。外からの情報によって刷り込みが起こり、考えはどんどん枠に押し込められる。ある意味、自分の直感是不自由になるんです。一方、それと正反対なのが彼ら。何にも縛られずに、プリミティブな感性を地でいきます。本人たちは美術という概念も、それを売ると



制作風景：土の工房の一コマ。このほか、布、木工、和紙・絵画造形の工房で多彩な作品が生まれている。

^[1] しょうぶ学園

^[2] 鹿児島県吉野町

^[3] 鹿児島県吉野町

^[4] tel.099-243-6639

^[5] ※裏面「エリア その他市内」→「複合文化施設」を参照。